

(註三) 沢瀉久孝博士『万葉集新釈』

(註四) 直香は別に、『禰にはつかかな』を『寝にはつかかな』の縁語としてゐる。

(註五) 『全註釈』はこの二百の奈那についても亦、『上のナは打消の助動詞ヲの未然形、下のナは、願望の助詞』としてゐる。

(註六) 『評釈万葉集』巻一・一一六頁。

(註七) 『万葉集東歌の研究』一一二頁。

(註八) 「何ぜといへか真に逢はなくに真日暮れて夜よなは来よかに明けぬ時とき来る」(三四六一)

(註九) 『評釈万葉集』巻五・二六八頁。

万葉集枕詞と植物について

松 田 修

このたび創元社から発行された万葉集講座は、近來にない快著で、万葉學徒を裨益する処多大であるが、この第二巻に、「万葉集枕詞全釈」がある。集中にある枕詞を解説したもので、文献としても頗る貴重なものである。私は植物を専攻としてゐるので、いつでも、どの本でも第一に、目にとまるのは植物のことで、この「全釈」を読んでゐる中にも、枕詞と植物の關係について考へてみた。即ち、一、枕詞として使用されたものの中に植物はどんなものがあるか、二、どんな關係で枕詞となつたか、三、植物學的にみて枕詞の解説が妥当であるかどうか、といふやうな關係についてである。これらについて、少しく私見を述べてみたいと思ふ。

第一に、この「全釈」に万葉集枕詞として取上げてゐるものは、四三〇の多きに達してゐるが、この中植物に關係あるものは、草本類二四、木本類二五、竹類三、合計五二で次の通りである。

草 本 類

- 1 あかね(あかねさす)
- 2 あさ(打麻を、續麻つづまなす、夏麻引く、麻あし裳よし)
- 3 あさがほ(あさがほの)
- 4 あし(蘆垣の、蘆が散る、葦のうれの、葦の根の)
- 5 かきつばた(かきつばた)
- 6 くず(葛の根の、つめさはふ、夏葛の、延ふ葛の、真葛延ふ)
- 7 くれなる(紅の)
- 8 とも(刈藪の、藪疊、真藪刈る、弱藪を)
- 9 すげ(菅の根の、真菅よし、白菅の、在間菅)
- 10 すゝき(はたすゝき)
- 11 たで(水蓼、八穂蓼を)
- 12 つきくさ(つきくさの)
- 13 つぎね(つぎねふ)
- 14 ところづら(ところづら)
- 15 なのりそ(なのりその)
- 16 なのはり(なのはりの)
- 17 ねばたま(ねば玉の)
- 18 はぎ(秋萩の)

- 19 みる（深海松の、俵海松の）
 - 20 むらさき（紫の）
 - 21 も（沖つ藻の、玉藻刈る、玉藻なす、玉藻よし）
 - 22 やますげ（やますげの）
 - 23 ゆり（さゆり花）
 - 24 をみなへし（女郎花）
- 註「つぎね」は次嶺と解釈すれば、植物ではないが、乃己（ふたりしづか）と解釈すれば植物として取扱はれる。
- 木 本 類
- 1 あしび（あしびなす）
 - 2 あづさ（梓弓、玉梓の）
 - 3 うのはな（卵の花の）
 - 4 かし（榿の実の）
 - 5 かへ（松柏の）
 - 6 かしは（秋柏、朝柏）
 - 7 くり（三栗の）
 - 8 さきくさ（三枝の）
 - 9 さくら（桜花）
 - 10 さねかづら（さね葛）
 - 11 たく（荒袴の、袴纏の、白袴の、たく衾、袴綱の）
 - 12 たちばな（橘の、橘を）
 - 13 ちち（ちちの実の）
 - 14 つかのき（樗の木の）
 - 15 つしじ（つしじ花）
 - 16 つた（石綱の、延ふつたの）

- 17 はねず（はねず色の）
 - 18 はくそ（はくそばの）
 - 19 ふぢ（藤浪の）
 - 20 まき（真木さく、真木積む、真木柱）
 - 21 まつ（ありそ松、松が根の、松柏の、松反し）
 - 22 まゆみ（白檀弓）
 - 23 やなぎ（春場、あをやぎの）
 - 24 やまたづ（山たづの）
 - 25 やまぶき（山吹の）
- 註 ゆう（木綿疊、木綿づつみ、木綿花の）の、ゆうは袴と同じで「かぢのき」であるから木本類の教に含めない。
- 竹 類
- 1 たけ（辟竹の、なゆ竹の、なよ竹の、さす竹の）
 - 2 しぬ（もしぬの）
 - 3 すゞ（み薦刈る）
- 右の如くで、これは集中枕詞の約1・8に当り、これを動物の（その名明瞭に示されてあるもの）あじ（鴨の一種）、犬、鹿、猪、鶯、うづら、馬、かはず、鴨、牡牛、ぬえどり（とらづくみ）ほととぎす、やさかどり、わし、といふ十四に比すれば、植物といふものが、如何に古代人の生活に密接な関係があつたかを思ふのである。
- 第二に、どんな関係で枕詞となつたかを調べてみると、その植物の形態美、色彩美、性状、実用からの聯想、また呼名の面白さ等から枕詞としてゐるものが多い。これらによつて、万葉人の植物觀察の緻密さを知るばかりでなく、その枕詞と懸り乃至序詞は、万葉人

が自然界の物象を象徴の用に供した証になるもので、何れを拾つても、極めて文学的であり、芸術的であり、且植物の長所盲点をつかまへてゐることは全く驚くばかりで、彼等が如何に自然に対して明敏な観察を行つてゐたかを知ることができる。「つゝじ花」から「香末通女」(三三〇九)「桜花」から「盛末通女」(三三〇九)その他「咲く花の」から「移らふ」(八〇四)「もみぢ葉の」から「過ぐ」(四七)といつた具合に、その修辭は実にあざやかで、万葉人独特の境地を開き、その修辭の上からいつても、万葉人の自然愛好の深さと草木嗜好の程度が伺はれる。

第三に、万葉講座の「枕詞全釈」及び「補遺」は、頗る要を得て信用するに足ると思はれるが、更に植物学的にみて、その語原、懸りに、なほ疑問があるものに、「あかねさす」「はたすき」「またみる」「みすゞかる」及び「さす竹」がある。「万葉集枕詞全釈」では、あかねさす(赤根指)の解釈について、

その語義について、鹿持雅澄は「赤根の根はたゞそへたる言にて、赤指日といふなるべし、指は篝火指などの指にて光耀ことなり、又日光の指、月影の指などいふ指も同じ」又山田博士の万葉集講義に、植物の茜草から出て赤色の義となつたと説かれる。両説ともアカネを赤色と見、サスを光のさすと見る点は同一である。唯その語原に於て、一方は唯赤色と見、他方は植物と見る差があつて決し難い云々。

と説明してゐるが、赤根指は山田博士のいふ如く、茜草から出て赤色の義となつたと解釈する方が、どうも正しいやうである。その根拠は次の通りである。

万葉集には、「あかね」といふ言葉の見える歌が次の十一首ある。

120	2	169	4	五六五	6	九一六	11	二三三
12二九〇一	13	三三九七	15	三七三二	16	三八五七	19	四一六六
20四四五五								

これらは何れも、日、紫、照、屋等にかゝる枕詞として、あつて、この植物の形態を詠んだ歌は一首もない。これはこの植物は単なる雑草にも等しいものであつて、植物としては少しも見所がないからである。然し少くとも集中十一首も歌に詠まれてゐることは、当時万葉人にはこの「茜」が染料植物としてよく知られてゐた結果であると思ふ。「あかね」といふ語原は、本草綱目啓蒙に「茜草アカネ根赤キ故ニ名ヅク」とある通りであるが、仔細に観察すれば、根の色は赤といふよりは黄赤といつた方がよい。然し、これが茜染になると藍色になる。従つて、枕詞の「あかねさす」は「赤指日」と解釈するよりは、茜草の赤色の義から出たものと解釈する方が自然で、万葉の用字にも明らかに「茜さし」「茜さす」とある。指すは光のさすと同じと思ふが、これが日に懸るのは、日輪の色が丁度茜色であるからで、それから、昼、紫、君、月と用法が進められたのであらう。これらについては「全釈」に委しく説明してあるので、こゝでは述べない。

次に枕詞はたすき(はた薄)である。全釈に、はた薄、久米の若子、穂には咲き出ぬ、穂に出、裏野の山に懸る。語義、穂に出た薄のこと、薄の靡く有様は旗のやうであるからかく云ふ。「久米の若子」への懸りは不明、古事記伝に句を隔てて三穂へ懸るとするのは無理であらう云々

と説明し、その「補遺」では、

久米に続くのは不明、冠辭考には幾つも考案を出してゐる。す

きは種のこもれるが見えて漸に開出る物なれば古免といひかけしにや(古免と久米の語と通へり)これが第一案で、穂の出る前に籠つたやうな姿になるからコメリクメで懸つたと見るのである。又第二、三句を越えて第四句に懸つたのかも説き、この説に古事記伝や枕詞解は従つてゐる。なほ後考をまつ

と説明して居られる。問題の歌は、

皮為酢寸 久米の若子がいましける 三種の石室は見れど飽かぬ

かも(330七)

といふので、これは第二、第三句を越えて第四句即ち三種に懸つたとも解釈できるが一武事を職とした久米一族が鋒或ひは旗を立ててゐた様が丁度旗薄に似てゐるので久米の若子に懸けた」と見ることのできるわけで、むしろこの方が、はた薄の本質に触れてゐるやうに思はれるし、「みつみつし」の「久米の若子」に懸る枕詞も、同じく「みつみつし」の意と解釈し、若く健やかな一族を褒めた言葉を考へれば、枕詞としては、二つとも意義が一貫してゐるやうに思はれる。

次に、またみるの(俟海松の)解釈であるが、同じく「全釈」に俟海松の、「復去き反り」に懸る。「また海松」は海草の一種、マタの同音を繰返して続くもので、形は枕詞であるが意味上からすれば例歌の場合に所謂対句式序詞の一部をなすものである。

と説明してゐる中の、「また海松は海草の一種」としてゐるのは不可である。海松(緑色藻類)といふ海藻植物は存在するが、「また海松」といふのはなく、これはこの植物が又状になつてゐるので又を復と懸げ、海中深い所にあるので、「深海松」といつたものであると思ふ。

次に、みすゞかる(み薦茹る)の解釈である。「枕詞全釈」に、みすゞかる(み薦茹る)、信濃に懸る。「み」は髮頭語、「すゞ」は原文「薦」で旧訓クサ、代匠記、古蔘はコモと訓むも、考は薦に改めてスズと訓み、美夫君志は字を改めず、原文のまゝスズと訓んでゐる。未決定、信濃の国は古昔そのスズやコモの類が多く生ひ茂つてゐたと見てみ薦を茹ると冠したのであらう。

と説明して居られる。この「薦」をコモと訓むか、スズと訓むかによつて信濃との關係は微妙になつてくるのであるが、これはコモでなく、スズでなければならぬ。古今要覽稿に、

薦 すゞ 一名みすゞ 一名すゞたけ 一名やのたけ 一名やま

竹といふ。これは雪国の山に生ずる小竹にして信濃に多し 詞草小苑といひ、桂園竹譜に

スズ 一名ヤマタケ 一名ミスズ 一名ヤノタケ 雪国の山に生ずる竹にて信濃に多し、

と説明してゐるので、万葉の歌二百(296、297、)何れも信濃に懸り、信濃は昔、みすゞの名産地として知られてゐたものである。

最後に、枕詞「さす竹」の解釈である。「さす竹の」は、皇子、大宮、舍人、壯、斐隠りに、懸る枕詞で「全釈」及び「補遺」には、枕詞燭明抄、冠辭考、枕詞解等の諸説を引用され、結論として、今思ふに、さす竹は言葉どほり地面に刺して成長した竹であらう。この枕詞の全例歌が三七五八の一音一字書き以外は全部サスを「刺」字で表してゐるのは、語義の理解の参考にすべきだと思はれる。集中竹を刺す歌は無いが、柳がよく使はれてゐる。「吾が刺せる柳の糸を吹き乱る」(十卷一八三六)「刺し楊根張り梓を

「大御手に」(十三卷三三二四)を山田の池の堤に刺す柳(十巻卷三四九二)、實際生話では、竹刺をして成育させる事はよく有つたであらう。その刺した竹が伸びて生ひ繁るから、それをめでたい比喩として雲紀の君といふ敬語や、皇子、大宮の枕詞となしたのであらう、云々

と説明して居られる。この解釈は、「さす竹」に対する諸説の中では一番納得のできる説であるが、然し「さす竹は地面に刺したのも」と解釈するのは集中「殖竹の本さへ響み」(十四卷三四七四)に相對してうなづけるが、「實際生話では竹を刺して成育させる事はよく有つたであらう」といつて居られるのは植物学から云つて肯定できない。竹は例歌に出せる柳とは違つて挿木とはならないものである。これを成育し、繁殖させる為には、どうしても地下茎を利用しなければならぬ。然し竹の成育に適當な気温や条件が備はれば、絶対に成育しないと限らない。「越後名寄」に

親鸞行脚の日、杖竹を以て地にさし玉ひしに芽を生じ繁茂し、広林となると云伝ふ、最初の逆生竹 今なし云々

といふのや、「塩尻」に、

城南清凉菜園寺の上人、蘭多く植てもたりしが、夏になりし故、去年五月竹籬しわたりし置けり、其竹の中一本枯ずして青みありし、七月の比より逆さまに立し竹、上より一節芽を出し烈日にも衰へず、秋を経て冬になりて葱枝多く出、雪霜を衝て今年猶教枝のびて、葉の立上りて見え侍る云々

など見えるのはこの例である。竹は節の直ぐ上に成長点を有するものであるから、地に接した節の成長点の組織が死なない限り枝芽を伸長することはあり得るのである。然しこれらは極く稀のこと、

この稀なることが、めでたい比喩として、榮えます君、皇子、大宮の枕詞となつたと解釈するのは可である。

然らば、何の爲に「刺竹」をしたかといふに、これは籬用にしたものではないかと想像する。当時籬が用ゐられたことは、「吾妹子が屋戸の籬を見に行かば」(四卷七七七)「うつたへに籬の姿見まく欲り」(四卷七七八)「里人の言婦妻を荒垣の」(十一卷二五六二)「花ぐはし葦垣越しにたゞ一目」(十一卷二五六五)又、「恋しけば來ませ我が脊千垣内柳」(十四卷三四五五)等の歌によつて知られるのであるが、庶民階級は、葦の垣根、柳の垣根等が利用されたのに対し、大宮人や貴人の籬には、大陸文化の影響を受けて、竹の垣根が行はれたと想像する。竹垣のことは集中の歌には現れてゐないが、当時の庭園、建築の様式が、大陸風であり、その後の平安文学に竹垣が現れてゐること等から考へて、かく推定するものである。竹垣の爲には刺竹も必要で、このことが大宮人や皇子と閑聯を持つやうになつたと解釈すれば、枕詞「さす竹」の語義と懸りは一層はつきりするやうに思ふのである。

以上疑問の枕詞について、私の見解を述べたのであるが、これが正しいか、どうかといふことは、考へる人のよき判断に俟たなければならぬ。